

■ 一旦は強烈なアンワインドが生じ得る！？

「前言撤回の雨あられ」が、今日もマーケットに降り注ぎ続けている。それは、おそらくベッセント米財務長官によるトランプ米大統領への“進言”が日々繰り返されているが故であろう。

やはり、一時的にも「米国のトリプル安」を引き起こしてしまったのは非常に不適切な戦法であったと言わざるを得ない。数日前まで加速し続けていた「米国離れ」がトランプ氏の望みであったとはとても思えない。今さらになって米国離れ、ドル離れに歯止めをかけようとするのは容易なことではないが、まだ「遅きに失した」というわけでもなからう。

とまれ、目下の市場では強烈なアンワインドの動きが生じている。昨日（23日）のNY金先物価格（6月限）が125ドルもの下落を見たことが象徴的であり、結果的にドル／円の底割れもひとまずは回避されている。

前回更新分の本欄でも述べたとおり、ドル／円は140円処の重要な節目を明確に割り込んでしまうと、23年6月ごろから形成されている「ヘッド・アンド・ショルダーズ・トップ（三尊天井）」が完成し、以降は下値余地が大きく広がりやすくなる（下図参照）。その意味で、今週22日に一時的にも140円を割り込む動きが見られたときは、さすがにヒヤリとさせられた。



も140円を割り込む動きが見られたときは、さすがにヒヤリとさせられた。

そして、結果的には「22年10月高値と以降の高値を結ぶラインと、それに平行するアウトラインとで形成されている上昇チャネル」を明確に下放れするといった事態もひとまずは回避されている。

そもそも、米大統領に米連邦準備理事会（FRB）議長を解任する権限などないし、実質的に不可能なことでもある。むしろ、その点については何としてでも6月の追加利下げを実施させたいトランプ氏の

“脅し”に過ぎなかったわけだが、米国株やドルを売り叩く理由を求めている投機筋にとっては、格好の材料（＝売り場）提供という格好になった。

本日（24日）は、NY時間に日米財務相会談が行われる運びとなっているが、米国側のベッセント氏は「具体的な通貨目標を追求するつもりはない」としている。会談の内容が伝わってきたところで、あらためてドル／円が戻りを試す動きとなる可能性もあると見られる。

とはいえ、当面のドル／円の戻りは自ずと限られることになるだろう。やはり、144—145円処というのは、当面の上値の壁として意識されやすいところ。ユーロ／ドルも、今のところは「1.15ドル台での値固めから一段上を試す」という状況には至っておらず、足元では1.13ドル処を試す動きが見られているが、上値追いの流れが絶たれたというほどではない。いずれ、再び1.15ドル処を試す動きとなる可能性は十分にあると見ておきたい。

「覆水盆に返らず」という格言が頭から離れないのは、トランプ米政権が相互関税を発動してからそれ（4月分）以降のハードデータを、これから順次目の当たりにすることとなるからである。これまで確認された1—3月分のデータは、むしろ「駆け込み」によって持ち上げられていたところがあり、その反動は決して小さくないものと推察される。一方で、すでに多くのソフトデータは先行き不安をハッキリと示している。

少なくとも今後1～2四半期は、グローバルに事業を展開する企業の投資計画や業績予想もかなり悲観的で控え目なものとなろう。当然、世界的に雇用や賃金の先行き不安も台頭するだろうし、株価の戻りも当面は限られたものとなろう。結果、世界の家計は総じて節約志向を強めることとなりそうである。ある程度、覚悟しておかねばなるまい。

（04月24日 10：50）